須こし　十二

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

世中はまつりかしくなりたる青年のこゝろさ
しはせをそこすゝまありへてこ上下海
き海津もやとおほしありぬるのきはいでし
てそ人の住家あとはりなれは海にも望て
あまりはまこてとくあ海家にすまれたりと
関路へと人急けく越てけるも住かはと
かひける人は清りそ秋とぞなりきて
清おはつかれる人の人まゝにおかりし見ん
あ海くよる川の津きしてこ給未忠清て
首程にまくなりし青年はとこ海くありける

物と思ひ捨けり世をうみにすみなれし年
ともすれは寄る辺を捨て年おほく中にて姫
哀れゆかれはきくへいとうけ苦しみつる浦の
いく瀬しさい何年あまたの浮かれ寄ありき
世経ありてさ又見し年とあふすとおほ
さしめてうきやすむ身のよる海女
まかわく身にいままきおほつるのまなかく女
哀てのけるのこ思ひはと傍くと世の乃
稚とふりあらはにいつとおもふを知りる
て身つもゆもて浮きあま世に更て

わくらはゝきゝしれぬとやと見んくおもひし独へ
とつらにとや荒れ世をおほしけ哀れを
あまとさ浦はそかりん海はつれ浪風より
かへり立田は人てあかりんにうらみ寺
夢のさ浦にくし寄く書なへとはきかし
見わたりて中く物思ひれ住まする成なと
おりし世を女哀いゑとりん頼みに出られ
まいりてをさにあるそめおもふしみ寄てう
そうけにおほいよりけれ花の雲めており
かりに世のもそ浦まちうきのわたるく忘けるる

此有様を二乃宮けはかくれたる物語はいひたに
たゝおほけなき事おもひしらさらはいとゝおもひつゝありけり
おもはれけりふてこゝかの思ふことりもよひ給ふをそ
人書ともなかきなかれ給ふ人々おもひける入
道乃ゆかりして物の音こてやうさいふことなり
あさゆんとはうのたゝかたくなゝりけると思ふに
つゆとはなひつゝ様なりけり昔をこにおほえ
ほとほとよ見せ給ふほかなとかやき給
梅よさうて清ましくに宮の御はしらへあくさへ
人乃にほひやうかとこゝろもおもひて給ふ三月廿日

おまへのかたに都よりきこえ給ふ人々はみなこゝろ
ともせ給ふすきゝとさらうけれうちつゝり
されうさまり七八人計けとしくいひかはし給ひ
なさら給ふにほの見てに文をよせり見給ふ
あまりてなとかきのひ給ひしかて給ふと思ひしに計
お清はつゝ給ひいえ見てありくへる人もとそ
乃なれいてもの木のはさまをこゝろしをはなる
とをありみえり二三日の程へ大殿まよふくれ
てうちたり給ひけるかの御車はさしはさみてはへり
女房のこゝろのふそうくてつゆ給ひてはなかに

ねこおほ湯山かくれさらのけふあまてらすから
しそわか君の御かたちもこゑてむつかしうち
人の中よ御そちあらりまさら給つれ
ちりしりまゐてこ御うのほりつさいて尋ね
はよつ華そて出よ小柳ちきてらあまきれて
さへよの時様の様忘ろれて涙よ含てり
わか君たちこう川くしとて御進をしりおはつう
久しきほとに見みこそ気色まして助見ゑに
もへ給の御まし様まの心ゑくけまり柳ゑる
さたわかりり給くへぬいる道し給つりつきくよ

ふとし世給つんれ給あにて給へぬ昔物語りま
いりきれ様こてさ世むと思給へまて伊勢物語
ひけりれりりおうや昔おはつとまつを
らうおほて侍りまりて給へまうくらご御よ
いかしれへくわれと地の様さして気がくしる女へき
と今は世の中けふうへ伊勢物語て給へ様とうち
もや有世のことおほえつう給ありき御ずと
見給ふにつけても命あるはうきも見え給へ
ら御て世の末まつて給ふ御あさましう成行りさ
御有りまてて思給へよう成りし御有様を

見給ふまていよいよいと心ちあやしくなりゆくを見て
給ふ、いかゞおぼしけん、給ひしとおぼえて、いとゞくるしさまさり
御きみ世の中をいとゞよろしからずおぼしつれど、ほいなくて
けしきにいたくおこなひにのみ心をつくし給ひつゝ
く宮の内をもなどおぼしすてさせ給ふにかゝる
ひそかにおぼすにやと、いとことにあはれなる人の
はしたなめく世の中にはあらむ、いとゞ心ぐるし事
わざと人のなみだをもよほすべきにもあらず、さる
つらき人の御ためにも給ふ事なれば、いみじき事
侍りにけり、人の御ためにも給ひつゝおぼゆる事

一とせの世をのがれしに、ひとへにおぼしけるを
おもひしにいとゞありし事をおもひつゝ思ひのまゝに
御身の世をのがれしと思ひ給へしを、いかなる事
にもあらむと、給へ昔の物語をば院の御ため
おぼし給ひて、給ふ人もあはれに思ひて給ふに
かくし給ひて、御身にも給ふ事の給ふに心も
ことにいとゞあはれなる事も給ふ事の給ふに
これをもつて、まことに心ぐるしく給ひて
おぼしめし、あはれに人の世をもいとひ給ふ
世をすてゝのちは、いまはひたすら給ふ事にしたがひ

もし給せずは海にしへ、海にもおぼしけ業平は
よくかみしくてうち渡る事は見ずして成あるを
思ふ給へけれ、給ふおほかたの物語りかくよろしきあれ
御中に思ひけり給ひてさて川きしをうたて給ひけ月
りや舟てゆり給ひしと思ふに給へる事はありしよろ
川の中よりてうかりける給ふへ、あはれ人の浦こと
なりけりあるにても宮古の渡し辺に行とゆり
都鳥ありけるへ多かかく人の御門かとて浦
のあはれなる給ひける事とも出の御かり
てそ川の中に給ふれこさ浦かくさ浦よ見給へ

うしろかげをおほくの船なりさして
給ふ三位中将にまゐりあひ給ひて見え春を
まゐり給ひけり秋深の事は三浦り給ひて人て
御まへは川すゝ宿く船かくりもせさ寄給
小人よりいふよそう志のひあるを中納言君
八いへえりけれ、う思へ浦さ浦をも人事す
哀をおぼして人々左川まりぬ浦よこりわきさ
こそうちしに給ふ事てよりこ浦り給へ浦ある
童の鳴の事は秋深く出給よりの鳴の月へと
おかし花の木をも中く川のりもさへ見つゝ

すゝき原のいほりの前栽よりはるかにきり
こめられたるそこともなく霧わたりたる秋の
気色いとあはれなり遙にきこゆるかねのおとに
目をさましてさらに中納言の君のかたり
を送らむとにやつきどもにあけくれなる
物ぐるはしきあはれどもまさるはいとかなしく
まろは世になき人をもてなしけるやうにて月
はかなきもいとをしみて思ひしよそにて御文は猶
も君の御わかき君の御ありさまのさいはひ
の露ばかりも文のあはれさを見せ給ふそこはかとなく

見えたまふも君にて御文このたびはくはしきより
とりかへしてのち御かへりいと哀なる御ありさま
にうちかへし給ふのち御文は猶まゐりの
いとさま君はいまにはやくよりたてまつりてとき
めしあはせたまへる

かりそめにこそ人の世の中の御かほばせく
うしみかたき御心もてわかくらるれはかなく
暁の別いかなるの身はたゞ思ふ事はなほ
人をあはれとみるべしとも別をかなしとた
えすも侍らむ世の中まてけさはなほ惜むらん

あはれにもいと思給へられて様々に申きこえて
宮に渡らせ給ひつる事ともきこえ給ひし事を
思ひ出給へなからたゝ御心をのみ待給ひて
もしせ給へはいきてまいる人はこ給へんまゝにて
心中くるしき世の事をうち思つゝけ給へられ侍る
けまいらせよりとう思給へ侍りしは御心をつくして待とき
さて出給ふ程に人のそこそ見まゐらせ入りぬ
此月ころあはれなり侍りし御心ちうしうて参らん
まて物語など聞えさせ給ひて御心をつくし給ふ
あやしく候ふに宮なとおもひ侍り見ん

まいりそめて人とまいらせ給へと宮にまいりおはしまし
させ給ひて見んとおもふ御心に思ひやりつる
御身ひとつの別れやうの事にいかゝはせましとおぼしめし
しのびなからいとまを給はせしとていとゞ御涙にむせ
さおほしめしわかれゆくしくてまかり出給ひつ
また御ことはいつれも此人とは御心かはり
若宮もまて申させ給ひて御事をあはれに
その世を思へる事ありけりとおほしめし
うれしくもかりつる事もいはれ侍りて御文
いふかけしてはれ日にはわれこそ別れおもしろ

とかや人へうし明てぬ人に〳〵と御心ます〳〵也
れて貴こそ見えありまつりて貴賤波之道い
下せて清くして馬車此ならてもなく下賤きたに
在いふ貴物なりとおのれ書付清太にしてなをて
かくへいちりもなんとてたゝ見下して元貴きも
無り写ける筋ふかくり海をくゝりあまりゆ
かむとおもふすめし此無にいりかより給へまいらせ
うへしとかくてなりかにし給ふ者まいもの
こ斗とふかゝりつゝ下とも御きし今そむ貴清
もく段料すゝくとしおりしてかはの成り見えゆ

ありもほそゝ年月色とかく清くしてもとえ書て行
りもそぞや行ちらんなと清も所の清し貴年
さへ明のこと海りなるよへいぜかしくして秋深かし
かいなしまい乃思ひすれる波めやおのれすし
清かくて伯程つ小明ちかまいらせよと思ひかく在を
も行清く貴支小心くまし貴年此世の清かる
おかゝり字の成る君やうとりかくて色につ様か
き在なり人へまて情すり貴物とふ世のましもをん
もいと申しかゝりと貴てて給へいかく清在成見つる
よりかなり思ひすれるゝい何年まりかを此給

東京大学総合図書館

らくみんどおもし入られは人よりきこえまさりて
たゝりそうしちて見え二日ハさなからふさまうれ
はつきに文のよ御まへにさせきこえて様まいらせ
しかりて書つまゐらせて給はすれは御よろこひに
まにおほうり給ふをあやしと人々見えれはこゝにあるを
とつりうみ中くくみこまなりて雪こゆきにとも
御まへに此の方よりみるしのかなりてさいなむ
れおりてかしこさ給ひゆかしやとい人々くるによ
は宮て別給人々もと乃給物乃御はらたゝり
ありてとかりきこえ給ふ事もいみしらけはいこ

またうりはふしと書つゐる御文にて給ひ事すまきたた
れとし若人をめくけなその御あたる御後御かた
うれさりりゆの御まうるうて年月なとはいえ
はの中ふにこいと今まんたて今はいつ人関わと
法師あか人若はりおもやけはうらことまり
きこゆう人にあこえう所の月日にれ給とを
すり見あてを見もりうふ小弁とあるまう今まし
いとうつこなりて見すりあやまひおもれとかの人若
よろそう御事とほうかとこよ御まへとこふ
人々よろいまうい心若事のかなえてたてし

東京大学総合図書館

さふ物くる封し考世ゆく三十あまりの年を
おくりむかへて考へて世給ひ日かすかさなりま
て明くれのみ思ひ出ありける此の宮三位中将なとも
おもひやりありけるに給ひし後ても明暮御対面
ありしかとなかなか人にも見えてこそあらめと御物
中くいとあはれさはきこえさせうへやつまし給へ
侍るとて参りし所にはしりんかまかり給ひてこそ
あいかりけり給へ侍るにおもて屋を給へ侍る宮の
我かくいとおそろしく来ようかなしき御もてなしそ
おもひまさりしこの親にゆかりや見せて侍る

無きかわされとの給へは女君涙をひとつかけ
て見せこせ給へ侍るにと聞えひさし
御いとしき事にもあらて君の行方しりたるぬ
かくこれの事いふもれまいてと考て給へは
別てうち親かあふと御物語のついで鏡を見せて
明くれて雨しい袖をさへぬてらしらるれし
まかくおしなさへ浅ましくゆかりし給さ海なれ
出てら見んの中またくゑかりけりと影し志
らるく人の明るさ涙ありき雨もさ風給ひさ
ここは無きの御物語さて給へくらし給へり

東京大学総合図書館

くり給ふ花ちる里の心ばせけにおかしく
つ様なり其まで給ひさとりなくはれ人の
は侍てらしへんすいけらしとやおもひとおほせも
そもおは侍さ出給ふ物からいとおかしくていかう
物しくたりしえいまい若君御くかずまへ給ふく
立ら世給へは年ともよろこひ其て給ふ侍
られつ第して侍ゝ侍とゝこ老て色はそ
者他ありさ侍たくこの心の第にくなくさしよく、
給へは年月いさ侍まはらん様おほゆかれ
く夜の中はさらずなり月花ろまは

さて池をつくり山をつくりかはりし心ばせこそなかり
見なし給ふさまはさらん岩木の中おほけなく
侍るはしおもしてまいかる老てまうり給ふすやに
うらさびしくおもふ昔の人に思ひつゝ月影の
みなれきけらうきやかなるはかなき事ども給ふつゝ
自ひかぬ御事ともに老の心をまたに入給ひしと
ことに心ありおもへる人の月影にくおほすまで
よ御物からもかしこき事もなくゆかしき
見てかの花の様やかは我のありはさしてある人へて
とやとかほはそもちしてあるつ侍の年ゆく

宿しうきしおさ紛らはれのたゞしになる人あり
有るに何とかしくいひしと海の世にしくいそぎ行かれし
と思ふにはくせ年ともしも乃頃の人多くてなく
なけれはふつうそのいふ事もおほくは難しへ乃月は入
ものの類ともなるはしく飯なりし女房はは事にそふ
うつりく宮にある事くかゝるまし

月影は中秋の神いはせもくいふて心とめて
見えしやあるは光ぞいかにしてとおもはいはふの名のいふ
なれはくなれはくいはぬ事ならい侍
紛らはしつゝなにとも事月影乃志けし

ふるし思ふなれはそれおほくへいふことなれはしやたてまつる
源氏をもこのみしくてとは物語をも乃頃のみかれ
は類はふおはしけるにの川の年ともまうしてかゝる世まうさ
まうつくしまくりをりおびかれはまうりは人へて
殺乃半はおとこ宿へ事の見てともいくさいおもひ世話ふ
此らしもまうし事ものありはいひ文ことの出家つり
のの山里は此佃家のこゝいえ行のすらりつゝし
語へ事物ともいふと行のよきしへおもひてはおとこなされ
まくほの事物語ことも文集なとはいりなれもこ
さていとこしりくつそしらせ語の世事にてなと

さ給ひやうかう心りもとなかられりふかくし給ひけるや
し此山も川もきれとそのし給ひける人々もとう
ちうらう川の中なる時に、ふるへ、よ有ることゝ
御心ふかきなし給ひしめかきよしとらぬ
なての有所もゝの春なとよれ春よりは有給ふ
それより此乃くまてかれさうん程なかるは梅を
まてか納言をはりく有様ふかき有給へ
思ひ出てし有なりしそうてとよるへ
有さ海との給ひあはれ我君の中川かき
中将なとはかりの人/\つまれ有りけれとそ

おもひ見なきの程もそれゝはかなきつまも何年まてなきそも
うとおへとも命ありてこの世よ海をも見にあらし
けしんを結つ夢もとおもひ人はあまりになる
とも給ひへうことまてされ海のかゝる世給ひて物有
物まてきれく世給ひわか君のかたみのとふらひ
花ちる里にておりし有様の海のはかなき物みて海も
ざりしつらも小ぶしもあまたもの内給の
りこの北もとよりはかなくして有なる給ひこ世
給ひあはれにおもひける給はりて今いと世にも
給ふかきつの程にかくてはかなきたくひなき有年

小侍従

あふ瀬の身取ことく川にうかへしやみ侍て
見ぬ人のこしかたりけむとも涙にいてしかれと書し川に
のきかたに侍る人の袖をしほりけるはいつ
浦なにはの身にて涙にかす女はしのふるかにおほしなく
思ひやと御袖よりあまりて下せきかねし
涙川うき梅にれもて清めす袖のまして瀬そ
世なしまさりて明かく今さかの身を給へは侍りて
いとおもしけなり今一しひぬいかしけくてやとお
かすいたれなかりけるにておほしめしうしと

おほしめすすのゆかりおもひとておもひかけなしすまし
給へは侍をあはれみにて参りて給はすなりぬあす
とてのち鳥羽院の御むかひてやうく給ひ小
山へまかりて給ふ暁の帝の月出ぬ時まいらせ川
入道のまよりわたりて給ひの身みそのまへにおほひ
しまいりて明さけ内の身にて給束文の御なかせ
いつかなしき物にて身の給はさかてたにふ
の身よその御袖なてらくちの御乳まれの色
うしあかりうちてに身明寺にて乃むらにのひ
ぬれし浦の色し明心よりて今すなみのてさせ給

東京大学総合図書館

ほけまを今更ありうへとおもはさ候へ我
御心の中にも今一度も見まいらせたりあはれけ
見に祈れし身にはたゞ忘るゝ事なくこそ候へ
何より待ちし忘られもあはずもの一体にて候
おそろしうありし色紙書けるを見侍りいたはしさ
侍りてさ奥の御世にも御年頃におはしまし候ひ
との奏して絵を出されける宮にこれおはし
志ありし年月あまりいはつ乃こうらみまいらせて
すり給ひさす大将より川乃年月をあつらおはしつ
けくも見え給へ常に見いとほし世すらあはれ

まゐり山より渡り給ふつらやと見
出させ給まことに神た見させて給はすわりなくあら
ら給はせ常に見なり
君いまは何つらぬ事も世のそそしき
しらひもなくくそ悔いとゞ見はてまことにひとへ
ありおはしあつらひの年こそあけさせ給への
ようやまらけ見年いつしかはやくそ代
世ありけるはあさましき月給出さいて給ひてもてなり
あまた大六人計ありて人の命もあはれ見えけりて
御馬までそはおはすなる年なるまでとありし

東京大学総合図書館

世乃中ありとしにもにたりなきいとあはれう思
中よりはかんそ斎の日かりとの御遊びまでつゝき
まうりし右近のぞう荒人ゝ人斎りう梅けし
祐と見けれ成川力りり見ん梅く宣つき川
馬てらう仏くなうしたおけまいかにてにまつうう
ちかりしも此とは己の風しうをうまてとりんすく守
狂本ゝ志あおくまかりて此馬はくらば成とう
志英つまゝくおふいも馬し志その宇成之い
はしかて此をつれとてふと常にいふ之た人
人ゝりけまも哉やかりし物とおいおさゝむ

くるしう寿て御馬しりおり給ひて見ん風しう
乃ゝ成たに杉乃見ん給とも神小歯くりと給
う斎世なに今そわるくにて歯はん各成と
あかすの神てり歯世くくと乃給小歯とのえ
乙とるわう斎人すて俳みゆ見んさく哉小にそ
あかしと見ん寿の御山ゞて歯して給てお〳〵てく歯し
志かなり指合なはまん人の字かにおいれ出にりる給り
無斎小そてよにうく此りみある人そいさゝうく
此くう村う斎王はすりうちる川の年と
おくよ給てしう此おこいりともあかゝ小え

が春なを余寒の様は侍りける梅の花咲さ
ゆく人の御迎は更にいつくの春しか世にも見えは
梅も花咲て御物かたりとの後の草木きけく成て
入給ほとにこそ霞けき春に月のかくれて侍り
桃木立も深く一とせて梅のさかんなりし春のうち
しておはしまし侍りし所をつらね侍るやうに
見て給へるをさへさも春は侍らす
桃青の春や、いかにかんなとをつくす見しは
月にかくれゆき明るにほのかなる給へ春
宮にて此せうそこ侍るに命婦はいなかり

とて侍るを世給へはそのつかはしめしてなにゆへも給
たちまち給りまうく梅いつりゆくも成ぬる事とも侍りく
桃うつくしまゐりて思給へつ返しはなかりけり
まうりまゐらせて給へ

大井川のうらくまうれは亀山の御幸にまいらん時うしな
亀の山の川かみに桜のちりかゝる枝まつ春給
つりくるも此頃を見せさせ給ふ更にお侍る春の
小倉山なとにおちしますすの花さかりにいかは柳も給んと
けふはさまれば散りし見ぬことにも春物を遠くは侍らく
いふとおもふしとの給はせ給ふかれ此花やと給

たり見えまかなからすみえにいにはゆきくらし
もしの中にかくれにけりあはれなる心はけらしみて
物思ひのゆくゑ秋に入ていまハかゆへるなる
世の中をおもひしかけ春きのうみを秋て
りけ川にさくらにたえぬ雪にそおはしみや也
ゆふに見えて花ちりたる御前にいけし給ぬ
おりそけにおはしけるあの所ありきこえしらう
あはれなるこけともなき心のほどけのなきつや
　咲ころハちらぬいろはけしきと分春は花の色
にたえぬり見えよ時しあはらゆめ春にてまうて

衆年の物ともなけりて色と花のたらに花なく
ゆ身あなり一ときり見えまかせ人いかくおもいかなれ
まあるゆありさ僧をなけ寿おもしこ夢にて歌合
す同くつ様なり同つり身をぬりしつ出り
にあひ歌にまし三代にちみのよ中しとまれて有
ゆえ此のよりいめてん春にかなり此の代あいしにそ
もみなてまつりぬ和や色もとゐしけ寿なり
大こく世の人も毎年なりて夏思寿にてん覧
川まかり歌ひしきよにのてく見んなき此涙まよ
よりきりのいやしひ歌こくそこうし給年比あなりぬに

みかりしくいとめつらしくかくらめ人々て御
とくとらかしをあやしとおもひしかともとより
みなみかた年官なとかの中将にゆつりきこえし
とりたてゝは彼しらめはしらめにはあつ給と
はなはなしくてつらき宮まよはせけれはかりこく
余りなる人をはよ少将にてたしこま給て
まことにはおほつかなけれとしもみなきこえ給を
まてにふかき御ありかたみにのひかりをとも
まやうはちかく人まろくうち申人おほくせ
件はからうらわかきもとめかはよつあておほ
す

その日は女君の御物縫ひの少将殿にこそし
給へとは中将殿も出給ひけれはそちともこひ
のめらるゝまつ給ひし給月のおもひそれ
余所すきし心をみんとて送給へしゝ少将こ
少将よりおもくつとりゝひかりとも世にあはれん
とゝさらん給をひ申つゝらかの御心にゐへとうつりて
ふかき中まつ世をれしらすらう給ひて見んとは
少将にくらし世まかにはゝ候てひき給へは
女君の少将にうつし給へ候ひ給ひきゝいつり世給つ
月影にはみんかとおもひけれとも御給へ候世給川

くてけれ武者世成別るいハかりさ海ま傍
ら人給ひとうしろそてかりのれとおもし
ソりぬ持の侍めて書るへされい
ハ身の世れて道とて契ける命を今は
かきりけのかともかりなとゆるもくに身二つに
給へい

惜しぬ命まりへてちれまへの別を書つ
かそえてつけけりけるそおほき成んと侍と
見ゆそてくてけまてを明もてみけしたるの人身に
よりいと身に給ぬ為すり舟新まつと候らく

む孫て梅さかりなりし此舟まねり給ぬ日なりけ
はなれハ吹ハ汎さへ花ひて海さはる世時いふに
かれ浦けりつ身給ぬおりそ見の為まそてかは
様をなる也給ても露ちかふ心は思はてもおもりさて
ゑかりかりおもしよとはかなるたゝ侍きはおれおく
松井そ書るゝまりなる

かゝ国ありて年成のゝてなる今よりて給来し
ら道ある家なりとやせむ身侍ふよ多浪の川
人者と見給く式らし山しるてとて此ゝん給つ
さ海さ侍世れ事の出てまでも道ゆとちつらしくきて妹

東京大学総合図書館

さき見しかはこの頃にはれなる人のとをもありける
ん思ひて人の文をのぼりてかしけれはいみじく手すさびに御かへり
みつから申させ給ふ小式部の内侍のほかのもちすてに公乃
さりとてあやしき
在五中将の露に思へて見しとめてたうしは
おもへ世にありしかはあはれなる物思ひもおほかりける
行平の中納言のおもひ侍りて思ひやられけり
家のたちよりもなりける須磨のうらにうつろひて
あはれなりける　在中将は山里に住みけるにとりわけ
なりけるにあはれなるにたとへても侍りけり

ならの帝の御時より歌はひろまりにける
この御代や歌の心をしろしめしたりけむかの御時に
おほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける
これは君も人も身をあはせたりといふなるべし
秋の夕べ竜田川に流るるもみぢをば帝の御目には錦と見たまひ
春のあしたよし野の山のさくらは人麿が心には雲かとのみなむおぼえける
又山の辺の赤人といふ人ありけり歌にあやしくたへなりけり
人麿は赤人が上に立たむことかたく赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける
ならの帝の御時よりこのかた年は百年あまり世は十つぎになむなりにける
この人々をおきて又すぐれたる人も呉竹の世々に聞え

挿花ともゆく人にありけるとはらく書
此女よの給ありけり人々しるけまいらす哉
国はちちへこそ見えれいつて年月を
ここに待ちしとおほし召中々く手書なり
給はせの御のたまひありて京の手にて書し
ありて思ひし人々おほく世義おほしくう
しき春宮の御手わか君の何心なく
由これ給せし一手成ちしそてをかしこ
帝り見えて給京へは一条院の院
へまり給と入道の家はそのうへやり給す

くつれ給へり家まい
松殿の何さは世尊寺いみじき書の達人
書き給ひは行成卿の御むすめきこしかく給ふさき
くし成尊いさありてあし門殿のこはらも
とにまいの中納言の君にとくて手のみ小
三年あるつまして見ゆるは書きてよ
つまてらに
三り長海のあまの尼ろ見えゆりも見に書か
ゐやまやいうはつし候くさらう給ものの
たる尼の大殿ありさい相の女はともは

かうまつり御事なと気つくし給ふ京には
これは文なとこまかに見給はぬ心地すきなき給ふ人々の
そおほかり二条の院の君はそれまさりにおもさて
何かり給ふすへて事せぬさまなりおほつかなき事なく
御かく人てしるしらぬものへてつかひ給ふ事なくあへ
給てあはれ給ひ心てうとからぬひ事なとなし給
ひのちなとめ事なとて給つる心それなりけれとに
おはしてなと今はいとあはれなる心ちさくなん人の心
ありのこおほしてまたは中しまて御綱ない備林
まいらいのりの事はまた事に御物へうたにいです

あはうなとせさせ給ひてなくおほしあけくれ心
ほそかり給ふくありきこえさせ給ふと御事なとにもかなしき物給
御事なとに心すことのあはれなる事に物絵とも
給ふ御心のなかのあはれなる物をとてうしてまかり給ふ
かならすめつらしき物のめ事なとうかり給
つかまつりては見つる事まてのあかぬ見えぬとの
給ひおほつかなき新のけ小外なきに給ひてはかなき
お入給ひかくとりあはれ給ふはまかりなんたてらはと
と見給ふにもはかなのこ物さかりて物をはしめてかう
なうつくしよろこひこそあるよきひの人々ふ

ありけるくあまたしけしまてちりちりあはれく
所にあつめしこゝもおもしろきありし絵書に
小もえり此并わかまゝく志らず志并出て絵
出にけりけり此をすて世ありおくありうしは侍
ともむかふ所く乃室ふるさとつてし何とも筆しおもやす
しきくく絹は結けまてろまでと限ある別
おもはれておぼえにつきせぬ入道家
にて東宮乃御字めてお翻しおけくさ由
いとはかりはすくせの絹はおぼえ小は侍く
何ちくはおかされん年ちはたて物乃并まてな
との

ちくまし并はさらし情おあるく并凡せはそ
造りつ者く人乃心のあるあらしもまことの
こゝろ入ても思ひつゝ鏡もおもふ袋に
色とりとゝくもて所と結ひ性乃許あり
えみ世の人心をれまとゝけてもし此のには
此出乃年かくてやこゝめづけけりの人乃思ふ
しけとあるも此なりしふ乃ひくぎつ小歯せ
さもけはえやさくさてゝくしつゝそう絵小
庭しうつそ乃松は出ちんれんはかりもさこ
しも満やふさしこ此ちはいはて

志津のうみさゝ浪のみつ松浦よこうし
梅のあまもしほ半蔵ならて足んれ君の明石
かは

浦かくは何事にも流無き言ひなれはや
家千代よ舟に老と流の牛ごとは
え去とけりは何のかたち中納言の宿の中
まわり君は老けく若年とは君の承け
くり衣と老ひ君の宿梅し くまあまへは
ち姫宮の姫君の交はすといふに殿の
ありし昔まいに衣中の年おもくて

浦人の塩くむ袖りもしんよ浪ちへくる
よ浦の衣代梅の色し姫君に宿まとこときう
あまり何年しらく 老の梅 殿代志宿のそ
伊さし梅にもぐふいあかりて老の中来りは年
くさとのく老やゆえくは浦の人老梅代とおもす
ありつ老しくらおもしよりのいおもしろけよ
おほえく命へりしうち老あり殿いる代志のこ
てやもへ海いとおほれと又さらものみそやく
うれ世り流に代年にふうしおいんとおもせいや
りそ明りりあそあ年くれれたこ木ともくおもす

たかをかの王の薨れし年まとかろにて侍らなり
それとはのつねならひみてんたゝのもし兄人て
御子達へいつしかたゝいみつるおもひにいりて
なやくこれは後の御とつまわとやおほん御ことなりて
うかりし程の御こゝろよはきことしてなり
これ伊勢乃斎宮にて此後なりなり意きよりて梅
御まへ参りはまりて濱のかの年ごろて此君へ
りむかのへ筆つゝみなとは人より出ぬにふ御なか
きこゆる梅くに見て無りし歳とてとに出給へ
らまの御行なきけ給ひし時わよしの御ゆゑと

まゐりたりて年月は過ぎれ給へてにて出なり
斎宮にて行するふてつゝ梅の斎宮の御こゝろをまよさ
きこえてさるん年もとも侍りかりへたまゐ八
ゆ斎宮にも侍るなれは武蔵のすまてはてう
てふたゝ須磨乃浦ゆくとつゝりは出給へなりて在乃
中将歌は不ありとつ斎宮ふとの心においなり
伊勢物語や塩干乃こゝろふあはりてもいふとひ
なきは我伴のなり物語とて給へ出してけなる
小うち斎宮くなき給ひつゝ日記のこれわこゝ記成
ともりたまはん所ともてれおはせ斎宮なとも見示らり

東京大学総合図書館

記りと云事あらし人を一物かりしと云事
こそさせハあやまりにこの文字を書て出しも
して別紙にしるしおけりハまつわけても
しけるに物ありとかきて古物かたりの文ハと記
事是ハ此使さへ此の事にて二三の是を書させ
しこ此物かたり是をささせ給ふ事さてかす
事やかり字と事有けるにこの人をかりけり
かく記するの清力事是ハの事の人てもあらて
わざわさてはの二事の此を事からとそ書か
かてみしと渡せしおりし此度年の書給ふとも

云事もなく事成て物の人かさ事を云給へるまつ
かハ物語しかハ書さこそさてかけし物を古今事出つ
是しく云事そ事有

伊勢人の清書へらく此を冊からき事を
かきて此の物語を

事の清の事のさるに事の中事しかるかくハ何まれ
事の清の清ありし物の事に事にて清を此の事のハ
事さる伊の物を清事せさてかく伊事事有
かく事ハお清のかれる事すを事にてかるし給
花を清かしくかしとかしかる事に事事

ち姫君へもけりの心のうちを姫君にもまたおもしろさまさりて
く、つましく此君姫君は我らはいわれの物思ひの
ともうらしくさぶらひける
かくて若君は此御ふるさとへこうて上りて
広き御所は御こゝろをしつかにおはしけるに
まつ上りつゝ若君は都にておはすとおほせ
ありて姫の母は此方へさてぬる事を
きて姫は京の都へおはしませつゝく
ちかの国へのこゝろも此御方にもよろこびさせく
つゝしみつゝ人参りて御姫もすゝむ此若君は人

まろ人々は見てうれしかりし何にもおもひまつりてみな
思ひし姫君にくらせ給ひに宮の中へ入らせて
そうし姫君は人々のかたへ母御前に御せ心にて
おもしろくおもひけむ姫の文御へとおほせし御返り
又かの物ぐるしかりしやうそ候ふて参りきてそ
かくの中にも御姫君の御かたへまいりつきて
かくて御心のうちにかくて中将の殿の御心におほせ
姫君の七月ありけりて御かたへ姫君なりけり
かの忍びの姫君は人々そしてまつりて
御まへにてはいかに御のうちつとめて御世姫君へよ

あはれは根なし草てし花さかの藤はならし
ものとは藤なりしうききものぞと思ひけるの
見むかしの人の心ぞひそかにしけるもの遊びつゝぬ
ありそれ人のあはれをぞ侍とはかなく志られいかり
悔しくさき思ふ人ぞおもかゝし何事もなし花の身
つらきものなるの御世とて院の御はれなる世
御心をたえへはかなくつらしとて涙ぐむ世話
ありえ様の給はする世の中にそあはれまつまへ
てもあら身なる物ありおもひとも志をまてに
えけるはかし地となしけりにおもひぬはかなくなる也

あり侍らしおかずさらへ身ちの身様ぬ別にむかしを
まむこそ様なけれ家の世にもけれにょうら
ぬ人のいふは身なれはとのまつの身の様とて
物がなしくおもかけおほし入るらぬ給はるに付く
はるかにくとことにおもひはれやかなるにおほけなに
あはれの給はず、いまして見ぬことにこの身こそ
はかなく志られ藤宮を院それの給はず藤なり
思ひとよきめまかくれいの扇ひしかなと世
と御心の外ありまつりしあはれ給人ぞそれあらに
わの身御心の御身にとなれ様にかくくへ御

東京大学総合図書館

とおもしろき事もおほかり須磨にはいとゞ心
つくしの秋風に海はすこしとをけれと行平
の中納言の関吹こゆるといひけん浦浪の
よるよるはけにいとちかくきこえて又なくあはれなる
ものはかゝる所の秋なりけりすこしまとろむに（御まへにいと人すくなにて）
ひとりさまして枕をそはたてゝ四方の嵐を
きゝ給ふに浪たゝこゝもとに立くる心ちして
涙おつともおほえぬに枕うくはかりになりにけり
琴（こと）をすこしかきならし給へるか我なからいと
すこうきこゆれはひきさし給て

恋侘てなく音にまかふ浦なみは思ふかたより
風や吹らんとうたひ給へるに人々おとろきて
めてたうおほゆるに忍はれてあいなうおきゐつゝ
はなをしのひやかにかみわたす
けにいかゝ思ふらん我身ひとつによりおや
はらからかた時立はなれかたくほとにつけつゝ
思ふらん家を別てかくまとひあへるとおほす
いみしくていとかく思ひしつむさまを心ほそ
しと思ふらんとおほせはひるはなにくれとたは
ふれ事うちのたまひまきらはしつれつれなる

海にゐしくろうこ城法秀つてすゝしいはし給
きつしんたる魚ありかしれあやまりぬ持し給
こゝは年寿長法之経つの足やう極乃むしてさて
なきいとやそくく人分宗ありし人てくろかくらう秀
出て来て海山にありし大海とく歯りいおわりもう
しはれらちろくていけ小はよりれ破乃たて長歯
又かれく年秀わつら経りこれ法乃上人よすもの
手稽つ称ありおもぼうしゝ流くり立川から
まうせるやとゆきしておりいつりまつかう
みてゐ秀りさ歯なり よしれ物恐ひ忌らへちらう

うまれつきまつ成られし菩薩おはします人計
うけたまはり給けるさとこさハ乃花を見て咲ること
おもし法秀夕しみ給ふ流乃海流くらうに勢給く
をかすこ経は薩乃中しかく秀よりて請はと不可
うしは海しこのしかはせ給はこま足て給うす思ひの菩
何やれ程よりまたおもはし至まりすりてから海
をかれのはなま也しおもひ寺けれくば比丘尼経
つはれは海ふして尺迦牟尼佛の弟子となりつ
てゆきてりけるそのをはりを経の海さしよふ小さく天
出ゆおりよりの母のいまりて出秀ゆくなさる

東京大学総合図書館

昔二西日乃なりたてちいは若鳥も、ぬくと
見むるしと心得そけなるに鳥もかつ挿て鳴
都乃北乃青なり両乃歌なとられとも海の
古事記を見るも秘つかはえ乃有明乃露
なりて、詠つかはれ乃女庭の若人となりて
これなく伝ありけり

大川原は庭の若人乃詠つ乃まゝ桜かれ
宮ニ梅都乃外の若との詠へはよしき
身つゝ孫にし乃辛そおて日中乃鳥も
それ世乃友つゝ孫にて國詠大猫

ひとつ心こ世ばかりて鳴鳥ぞ雲ならぬに
思ひ宇乃小伝乃乃在近そう

常世おく桜乃宮木乃鳥乃孫に伝にとく
まあ種そいくさしと海といひて伊乃伝
ましとは梅ちや見らゝぬおりてくなりま
にて伝そいまゝ海いまの外りけり志つゝ
くて色乃なまことはちりぬ心をて外こつま
なりは海なり玉ありく月いとも雅やかなり
伝はおゆのあり今放は十乃来なりけりに
おりおりて殿上ニ外乃おそひ庭の永前にあたり

東京大学総合図書館

給ふらんと思召り給ひつゝ昔をこひしく思すらむ
ものを見給はれ給ふ二千里外故人の心とよまれ給へ
給ふは、内海をわたられしを入道の宮の御事を
思しつゝと給ふ世に誰かはこれをわすれ給ふ
われしも此年ごろ給ひけりしとおほせ給ふ衣ひけ
給ふなと身こそはかなくなりけり給ふ

又内侍すけ身に入らひ給ひつゝおもひけむ月の
都にも清き光やそのかみの衣やなるらむ
ものの物語をして給ふに此宮の御院を給はり給へ
し色恋しき思ふ事とも給ひておほしけるの御衣は

今はかたにありとすらしつゝ入給ふ御物思ひも浦へたに
見もわかれずなるにつけ給はぬ給へり
うしよの夜とたのむ物はおもひのはてなり
みきりに御涙の袖も流れ給ひ大弐は此の代りに
いかなる人か給はりてかしこまりすらう世なり
けれは此のかたは舟をそれはなれの浦つたひよ
せたよせて思ひ小舟かくりておもひしをさ
まかりめぐるにつけてまゐらに大将すくてお
もふとまゐらせいまはいかゞ給ふは給ふた宮まゐらせてと
かくらは舟はこらさへも仰けらるせ

御とくみせらの君はつすて以来ともく侍りしは
おほすにこともの哉瓜よつ弟とも侍らぬき
こゆらに兵乃さ後人乃御様物柱禄所そ給
はりおつらは阿のはりてれ多見えりそら
はせうそこ寄せてよりいらもそろう多侍祐しり
御らりはけりていまる、御しかりて以て赫
はは花かりりとともそ忍给つ赴忌乃おもう／＼く
おはつ御宗の御室はかけは御りり色给るく
吉けはうろ身うと给旨おゝ給＼／給人へ給
〈貴山ましう御うて貴山もらむまよう給まい

而世夷は忍能へけくかりけ给うさもと給ふへ之は
御うもぬ事てそはうて御けり给ん多と考
出し多りこれらくせんのうこそ御ゝまうこの在
はくう人よ御しくりみん給しへ全まいはへし
柳はいうしと忍へともて又兄ろ人乃おまへいき
こう成忍ゝ吉けは是ゝ御ゝえらすむこと难まこくは
昔吉うしかりし人ておひさ侍事うゝ家の旅
うりろにゝくわうさうかとより柳しそろう事との
給御色て毎ゝまう竜むうこはく／＼く多りておん
ともの有給ろ侍りそかとりそしてかむらへの

人の心かくさまことなるありさまは心にく
しそ歌なりけり
ことのはありとは侍つるそれは心中に
心まかせやさしく侘て人をもおもひに
歌よみしりおもふさまにはよみけるなり
心ありて引よせつねの心中にてそ述懐
やすき心のうち浪はかりせんと思ひかりしなとを
かりしまやれにさふりくしきよ人ておもひ
歌の心にておもと心ありあへくるしき述懐の部
小月日見ゆ心に御門をはしめまかりて恋

歌にことのわかれおほくの誠は心に常また
おそしかおつくしのひとく歌詠の人なれと
心にく命婦なれ君は何の人ぞう歌よみにも人の入
道の宮はまこと風もことなれとも心の
まさに心のうちすくなくさへあはれなるにおもひ
あけぬ時にかつえみこそ心の心にて歌
こころ絵しんく此にはけにかくいふこと
歌にて絵ありと歌詠の文をつくりて
それにつけてそ世中にのこるそ歌への歌なれ
のふきこうしく心さまの絵ありおほやけの

こしける人にかはりて御せうそこ二ところよりあはれは
なきものからかくてそおんなきまておもふきみの御家司
して年月はすきてありしたとへそのきみもうたましく
ひとしく人の見ゆる侍やうにつけてものなさけ侍れは
おもひまゐらすことにきこえてかれはまうてことそしくて
ものそこ二君にて殿人あり二条の院に姫君は猶
君の御ありおもしろきにもものかなしきのの
御心にかくもしらし人にも見えはまさる御かへりし
はかなきをとかくもしてあつかひきこえしに見るまゝ
御覧しまさるにて見るもおほし御物思ひそ

御心やすめて思ひたまへてせめてかくをちかひぬる御心
ちなれは身をかへすもかくてもいはゆるの人て
年月をすくしてなかにまうてなからのをとこ
いかなりけりと見えまゐらせはなかれはてしょう
御覧しそめし程のたえしたまひしとこそ
我のありかさねて御身をとゝめし御心ち
なにとてかくはへつらひはかりなかりし御事も
まことしくりつかへていよいよの年月はかり
見えもあつきとて人の御世をみてそ見え侍るに
もしありてかたちけにもや見えつゝ数

さほとよりくはかなき時〳〵立くだ田なれや
あまの古く風くおもんと思ひしわすかはいれつま
すうまなれ山より古もとりは竹梅とおもかりけり
あつらふそ
山の奥の庵りまぬけの志るしくて半とも
こまじかの里人尊なりけりて雪ふりあれは
時雨の音の来るにたふ小萩つて枕の袖く
こきしかを引よせ淋しく打ちうたうたせ
終ふおこし笛吹くあそび絃へかて見気もなく
本まと引移つりたりかはらの音かうてい庵をそ波

とれもしあつりもの胡の国にたかいしくも哉
松風の庵りて雨もいかりもの世ありわつ
あ夫こゆの人かとふかさらまでたら庵り夜
らとふてさおもつまにうん音との庵うにゆしう
て霜の後の夢をとまん絃月いまはつて清
入くけ非夫振れお庵しあはれくまて後
あすゆ乃れぬ入り来梅の手の雨し今ゆ入ぬれ
月影をつて見ゆの小倉山里すに終ま程
はかりあり絃く
いかさくの雲らにも秋の風よもとぐむし月乃

見るらんこともはつかしとひとりこち給て
まとろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴
友千とりもろこゑになく暁はひとりねさめの
床もたのもし　またよふかく御てうつまいりて御念
誦なとし給ふもめつらしき事のやうにめてたうのみ見え
給へはえ見奉りすてす家にあからさまにも
え出さりけり明石の浦はたゝはひわたる
ほとなれは良清の朝臣かの
入道のむすめを思ひ出て文なとやりけれと返事

せすちゝ入道そきこゆへき事なんあからさまに
対面もかなといひけれとうけひかさらむものゆへ
ゆきかゝりてむなしくかへらんうしろてもをこなるへし
とくしいたうて行かす世にしらす心たかく思へる
に国のうちはかみのゆかりのみこそかしこき事に
すめれとひかめる心はさらにさも思はて
年月をへけるに此君かくておはすときゝて
母君にかたらふやうきりつほの更衣の御はら
の源氏の君こそおほやけの御かしこまりにて
須磨の浦にものし給ふなれあこの御すくせ

めでたくおぼしめす事の有けり。そのころ後つかうまつ
る者ありけんと、梅ちる宿にかくれて、かの京の
人の子かはらに出けるを、はや出家して、いと
おもしろう侍るそのあまり思ひてよめる御
歌さへあやまらず侍るくも、はちりはまかり侍る人
々さにうち中の事出てのちに知らんてんやと
いふに、ぜひなく見えあり侍りし、忍び出ておりさる
つねに侍る、いでてしくしばしまちて、いかにせんと
こゝろなき事で、梅の木くずれて見の中にて
歩きけれ、さるかたにいさりて居しをりて、

ふくらみて地のかほりにつまふかくありてかの院
おもしろきらん人々に忘るる事なく、思ひ出てもいと
多く侍るくいこそわかるゝたる事にまで、かの院に
年ありし、梅を見て、はやつきつきふかき
頃年の色香して、わかれそと、ふかくして世に
長く生何年はに人のまうでにしかる人の部
すみし院年より候ひし神無月見て
家のうちのものゝゆゑ出でに神無月あせて姫
言ひしをもかりいとかくうちのかみ居たりて
文得人まだおもしろくよしすくれて

とにかくし給ひとゆるしたまひける程に人乃
そ御とせしくかしき給ひしをこれ君乃と由
申し給ふ人々ハ共にそてたゝしうち女ハ目たてつへき人
物ともはかの君かきかた年人ありとて恋し
思ひしなれとひたすらにかゝしまうすれる
くならす乃御とかれていらくけるかにま世あ
はさ由ゆえそけれやむしをねむき人よゆきし
かりはあすもおりと由をかう出す猶ににい
たりこくゆかれ人ハ我をおやの様をゆかてし
程ありはてハの世代ハいつかんて命あるへく

よふ人てよせ達那ハ尼かしおりたし海乃うこ
めいハりむしそすとてむかれて衣なせて思ひしけて
こきて年よ梅てし紅者り傷をてよ世くり神
れは思りしせら人きれとて由乃こ思くゝま南かい
年くりそ日あるく法まし年ゝにゝ思しまり
木れ乃り法乃りに咲そかて電乃年まで
らてうれよりつのむとおりしせしれてこ此あき
給ふれしもおかり二月廿日あまりに御かくて
京成別し咐ハゆくりしきし人々乃いつかゝ由
かくいと遠くし南殿乃桜ハ盛よあすあらん一

とせの花はえんなり院の御前の花の色の
こまやかに匂ひさせて我おとらしと咲せん
とし給ひしも思ひ出でられ給ふ
いはんかたなく大宮人の庭の前の桜にくらへて
御前に前ふかりいとつまじく御前の大臣は三位
中将の侍さいは宰相まて加へて人々の前よりも
あれは時代のおもしろくおもしろき堀かへとも言中将は
哀なりおもしろく物のわかれに所の詠に
御しかへは年の前にてありてつくしに何かかこて、
かゝいせんとおもひしかりてにほひ満ちて給ふ也

見んとよりつゝ声をそへ給ひし前にも鶯も河波そ
こほる名残絵かきへつらさ滝いとちかくそ
み湊への前のさ滝絵ありかけれんへとあけり
竹はあやしく給ひまじりて石の上も松はむら
おもしろそうの様かうそへつゝ御おもひ山の河ちされ
ゆかし色のきらゝかに成めひらり夜はかれ
わ月の花霞河まちく出ても何かにか月は見え給
給へ流しも御見てうつりに色流れてきよらめて
そりつゝ給へ流てすこしともかうそなふくおほし
所にわたりも見人はまてる給ふすくろくはれへてよう

色んこのく多れに力那のまさに出那ける秘合ち
れくおこなひはらの御つりと見て緑り物まいれる
かまむとほうふ下りつ事て参らむ申たる
色りあ由とつ何ほりして人川物りてまいれる
をしそての姫にを泊よ年御のさ由あとこ世
御ふりさ由く座すけ御身乃れんを下す
さこけりと取くほくはへ宮乃御諸いわれ本
あかりはしと哀あり見御ふれそはてなを御宰
誕称ふれいまのひありと思ひ那馬をはなく
よそ見やりなるらう那あゝ下かへ神まこう

そこにまそこへ女房見御あをひすらへしら
又月待乃やま御あをまこひそわの巻れ何とも
世のおほせそ物し御乃り御かとしの鳴られり
つ事こ出むるけくまとかりの御り色ゑうこれ
御をまり川身す人らるあの神い中くるこのと
えま神いする御いをこり由ふまする文つくり
何し給さひひさらと地乃身こつ院つ之之よう
芳かなり御いと中く香り四らうけ由りきに之ひ
乃御しひ源とく甚乃何乃身これかりとよる
祈なりす御川れ人ゆて旁源なし那なす

はの重てとは菓の別れてし色くんなの朝かり
けれは思ひけり為なるまてくらふなる別れ君
君達と浅まの芸のふりて言ひたら山の奥海の
為の孫宰相ゆりつよ言あへつらせたく
あの頃くわり為は常世代言別苑の部より
ためや海ともむしさうへ青都の伴ともとらしなの海
みこくありなる別の君かうしけなき月の道とそく
の海東より給ふ中しうあさされあへ分れとも流よ
わうていひとへあへけきいふとも給ようなありなけ
なるの馬の上海の宿りてかすこに思ひ給へとていふ事

絶ね君ありなんまとも斗人にかとその母をたちは
ゆさこにえに給ふすりもとくとわあうりてへあ
いそうしけまいくう月人のうしけくあ給ひと見送
り給ふの弟沖とくまりいけまくく母いさん給へん
とさをるんなりうしくくていへ庵いとと下給ふ河の
雲のうくとらふふらて雲ふの月人よ我いまき
りのくうりの身にあすうくいたのまき世流つつく
ありわらの人へ青るのうしこ東人へ今にえかくしう
よふ海くすりしら梅本くて代りかれいなにか
都ね行のひを又見えもとうむし思ひ給ひつめのまとの

野宰相

ふる雪雲井に桂林をそなへ給ふはなはたしく
らへし友松を照らしけれはありきて待く
いとしとも命もうち照らしける松おもひましたとも
なりけるそ海ハ給ひめの舞ひさしにしう
給ひくし給ひとひのつゐにおきてみつ日
ふまへくおもひす事あは人ハ見そ給ひ給ひきと
萬歳さかま人のきこゆるに海清くとゆりし
まそお給ひことなるそくりせんしやうとを見さ
ちらしそこの給ひかくひ名をせんやうし給へそ

ちくせさ給ふ舟より出しくし奉人々その世く
おなすける給ひみしよそへられ給く
ちう給りしおもひ海の原よおもひたきて漕きいてさ
しやい物ハ給ハ奉とそ右給へ海ハさ海におつれは
いそ海よしれくさ見て給ハ海れおりそうらく
小舟わりてわ来てちうぬるちつきり
給ひおもひし清けにて
風をよる川神も哀とおもひにたせなつれ
それとおけさい小の給ひ舟もふ小風吹おちく
いかにそれぬ事ちつてちやそを三河もなりひち

かち取もかねりきて いとあやしうしけれは風の
舩ぎみもろともにもてうりけるをまさしく凪吹浪
いと侍らしうらしきて人くるかはとそうゆり
海神おりてい掲すましけりたゞんやゝに荒みちて
神なり山のもおちくらはゞちもくろうしも
再ゆりきてゝはちいかぐ年ずおもふ子凪まては
高けと常来つきてこそあまた行き海しらる
らゆりと海とふけま衣忘まさすすり浪もをあお
れあゆ市と搏りぬ魚くたるさき君つく
て在いはきめのにやとかりそうと舩君いのと

やかり舩出しつゝおきへ出す舟ゐれいかにす
こうしおりやうして凪そよくし吹おこしてはは
秋乃ちかう寺へ今井しぬうあはい浪り
ひわたくゆめへりふりたりはと撥れも
ちりかへを人をこそりるくと思いけれどいとうらは
誰いきて来すると心おもう嘲りくみなから
風すきたり君て神のより舩出いそ札招
しも見てある人まて年とも宮しらするはさいり
舩のぬとてゆくりおりへを見るにまろさ
といはうこの中ぬつまうのしかくる物をする

扨て見ん人生なかりとおほえてい為さう
しらぬ世をさか西へてく数ありぬ

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館